

『吟遊詩人』

報告を受けた時、ルポレットは少し困惑していた。戦争をしているのだから自軍への被害が発生しない、なんて事はありえない。命の存在であるテッラムリアの人々に対し悪魔は圧倒的な力を持っている。それでもテッラムリアにも対悪魔戦を戦える戦士や魔法使い、僧侶がいる訳で、有利ではあっても簡単に勝ち続ける事ができるとは思っていなかった。

しかし、それにしても今回の被害は予想外の大きさだ。

『天使王国』の領域を三割侵攻し、緒戦の展開としては順調そのものだが、逆に言えば征服すべき領域はまだ七割も残っている。それなのに、この時点でこの被害というのは、想像以上に手痛い。

なにはともあれ、侵攻中の軍団に起こった事は逐一『ワーム』の耳に報告するようにしている。

騙し騙され、利用し利用されるのが悪魔の渡世とはいえ、誤魔化さず嘘をつかないのがルポレットの身上だ。嘘をつかないことと正直である事は必ずしも同意義ではない、というのが彼の見解だったが、

『ワーム』に対して騙したり逆らったりする事は無駄と達観している彼は、果報は寝て待てとばかりにゴロゴロ寝そべって怠けている上司に戦況報告に向かった。

「うーん、もう定時連絡の時間かなあ」

悪魔としても龍としても趣味がいいとは言えない『ワーム』は、相変わらず赤毛の少年道化師か吟遊詩人の姿のまま寛いでいる。睡眠をとる必要などまったくないのに命の人々と同じ様に惰眠を貪る事までするのは『ワーム』の悪趣味だが、長衣を身にまとい狼の頭を持つルポレットはさして気にしていないようだった。

何処までも実務的なのがルポレットの身上だった。

「緊急連絡ですな」

「う、どこかで大被害でも食らったってえの？」

「察しがよろしいですな」

「・・・いや、言ってみただけなんだけど・・・マジ？」

「マジですな」

「・・・聞きたくないなあ」

「では報告せずにおきましょうか」

「いや、軍団の現状を受け入れ知っておかないとダメだよな」

「当たり前ですな」

「しよがないなあ・・・何処でどれだけ倒されちゃったのさー」

「ケルマディクにおいて軍団長カプノーザ及び上級悪魔三体が倒されました。」

現在第一大隊長がカプノーザ軍団の指揮を受け継ぎ、軍団主力をケルマディク攻囲に投入しております。

最新の報告では小競り合いはあるものの膠着状態に陥ったようです」

例によってルポレットはさらっととんでもない事を報告した。

聞いていた『ワーム』は一端聞き流したものの、後になって事態の深刻さに気付いたらしく、しばらく間を置いてルポレットに聞き返した。

「それってさあ、つまりその方面の侵攻速度が落ちたという事だよね？」

「落ちたというよりも事実上止まりました。」

今までケルマディクは一都市でカプノーザ軍団の攻勢を支えていましたが、陥落間近という風評により近辺の諸侯や王国都市は援軍を送る事に消極的でした。

ところが我が方の侵攻が事実上ストップした為、彼らも衝撃や混乱から立ち直り始めたようです。

早い話が、我々の侵攻前に夜逃げを考えていた連中が、それを止めたらしいという事で」

大隊単位で速やかに『天使王国』に浸透、蹂躪し人々を恐怖と混乱に落とし入れ、奇襲攻撃の成果を最大限にあげようというのが『ワーム』とルポレットの戦略だった。

だがケルマディクの抵抗でカプノーザの軍団は指揮官を失い、

指揮官代理は自分たちの能力に懐疑的になって数でケルマディクを攻め落とす戦術に変えたらしい。

カプノーザの軍団が担当すべき地域の侵攻は、ケルマディクへの兵力集中により後回しにされた。

悪魔の軍団が、気がついたら自分たちの城や都市を蹂躪していた、と思うから人々は恐怖に襲われ、抵抗するよりも逃げる方を選んだのだ。そして逃げる者を殺す事ほど簡単な殺し方はない。

無抵抗な背中に襲い掛かれればいいのだから。

だが踏み止まって抵抗しようとするとなると、例え負けないまでも手間取る事になる。

手間や時間の浪費は、少ない戦力で『天使王国』征服を考える『ワーム』にとっては致命的な打撃だった。

「んで、実際にはどれぐらいの諸侯や都市がやる気になっちゃったの？」

「まだ数えるほどしかありませんが、しかしケルマディク側は戦線の膠着を利用して態勢を立て直しを図るようです。しきりに使者を放っていますな。こちらで数人捕らえたようですが、少なくともその倍の使者は放たれたようで」

「うーむ、何だか面倒な事になってきたなあ。ケルマディク攻めを続けさせるか、それとも無視して蹂躪を続けさせるか・・・」

そこまで呟いて、ようやく『ワーム』は問題の核心に触れた。

「カプノーザってさ、そんなに弱かったっけ？」

「閣下に比べれば弱いですし、一般の上級悪魔に比べれば遥かに強いですな」

「そのカプノーザがケルマディク攻めの最中に殺された？」

「らしいですな。しかも相手は空中から乱入してきた天使もどきだそうで。あつという間に上級悪魔一体を屠ったらしいですよ」

「う。なんかさあ、嫌な予感がするんですけど、どうよ？」

「閣下の嫌な予感が何を意味するのか私には解りかねますが、

前線からの報告ですと、相手は後光を放つ人間の小娘の姿をしていたそうですよ」

「金髪の一本三つ編み？」

「そうですね」

「浮遊盾を従えて？」

「そうですね」

「銀の両手剣でひたすら相手をぶん殴る……」

「まるで見てきたようにおっしゃりますな」

「がー！奴はアンゲルウルプにいたんじゃないのかっ！」

「誰の事をおっしゃっているのか解りかねるので、何ともお答えしようがありませんが」

「『城砦落とし』という正義馬鹿だよ！」

「お言葉ですが、我が軍の中で『城砦落とし』を承知しているのは閣下以外にはおりませんが？」

ルポレットに冷静に言い返されて『ワーム』は言葉に詰まる。そして高ぶった感情を鎮めようと深呼吸をした。

「解った。訂正。どうやら『城砦落とし』はアンゲルウルプからケルマディクへ移動したらしい、と」

「その判断ができるのは閣下以外にはおりませんな」

「そうだけど、まあいいや。そういう推測で。しかしこれは何を意味すると思う？」

「なに、とは？」

「『城砦落とし』がケルマディクに援軍として派遣された戦略的な意味さ」

ルポレットは小首を傾げた。黒目がちなつぶらな瞳は瞬き一つしない。

「今のところ、あるようには見えませんな」

「本当に？」

「ケルマディクを本格的に救うつもりならば、『城砦落とし』とやらが乱入し、カプノーザ軍団の統率が乱れたところで背後から救援軍に強襲させ、一戦で勝敗を決しようとするでしょう。

しかし『城砦落とし』は単独行動です。

カプノーザと上級悪魔三体は倒されましたが、こちらの包囲は却って強化され、ケルマディク側の状況は好転していません。

また我が方の侵攻速度が落ちたとは言え、

諸侯側は一息ついたところで反撃する為に足並み揃えて軍勢を結集するまでには至っていません。

今のところ、これは『城砦落とし』個人の行動でしかなく、

アンゲルウルプで決定した諸侯会議の戦略とは無関係であると判断しますが」

冷静なルポレットは表面上の派手な変化に惑わされなかった。確かに『ワーム』配下の五人の軍団長の一人が早々に脱落したのは痛い。しかし侵攻速度が落ちたといっても大規模な反撃を受けた訳ではなく、現にカプノーザの軍団は軍団長を失っても、また多少被害を受けてもケルマディク包囲を続けている。

対して『天使王国』側には兵力の動員や集中があつた訳ではない。数十人、数百人単位なら動いているかも知れないが、悪魔の軍勢に対抗できる数千単位の軍勢は、まだどこにも現れていなかった。主導権はまだ悪魔側が握っていた。

しかし、それはいつまで続くか解らない。『天使王国』の三割を制圧したところで、既に三万を数えた悪魔の軍勢も無傷ではない。特に上級悪魔の消耗が激しい。地獄の諸君主に捧げるべき貢物を『ワーム』が怠っているのは明白な事実だから、これ以上地獄からの援軍が望めない以上、悪魔側はジリジリと数を減らされる一方である。それを改善する手をルポレットは既に打っていた。

「それはそれとして、閣下。やはりアンゲルウルプ攻めをすべきかと存じます。立ち枯れているとは言え、王都を攻め落とす事は象徴的な意味でも重要かと」

「またそれを言うの？でも長駆派遣すべき頭数なんてないじゃないか。それに都市自体は荒廃していても中枢の『執政宮殿』にどんな仕掛けが用意されているか・・・」

「それは確認できました」

こともなげにルポレットが言う。かったるそうに愚痴っていた『ワーム』は目を見開いた。

「ぐっ」

「閣下がサボっておられる間に」

「誰がどうやって確認したの？そんな駒はどこにもないはずだ」

「現地の悪魔シンパを募りました。百数十体ほどが快く賛同してくれましたね。それで諸侯会議を急襲してもらったのですが、案の定全滅しました」

「あ、そ。悪い奴だね、君は」

「全滅するのは彼らの能力不足です。それでもこちらの役には立ってくれましたから無駄死にはしないと」

「そういつて納得するかなあ」

「そんな事はどうでもいい事ですな」

悪魔にしては比較的愛嬌のある容姿をしているルポレットであるが利己的なところは他の悪魔と変わらない。偽悪趣味がなくて理知的だからより冷徹に感じる。

『ワーム』はルポレットの口車に乗って全滅した連中の事を考えてニヤニヤ笑うのだが、ルポレットの方は、まったく気にした様子はなかった。淡々と報告を続ける。

「で、アンゲルウルプ執政宮殿の防衛機構はおおよそどころつかめました。主武装は対空電撃です。そして周囲には他次元出身者に感応する防陣が張り巡らされています。やはり我々の本隊を投入するのは時間と労力の無駄遣いですな」

「それでどうする？」

「実はテツラムリア在住の諸族に呼びかけて編成している軍が大方まとまりました。精鋭を選抜して欲しい三万程度捻出できそうです。これをアンゲルウルプ侵攻に使用します」

「単独で突出させたら、アンゲルウルプに辿り着く前に撃滅されちゃうだろう」

「それは我々の正規軍団で両翼に圧力をかけていく事にします。

突出させるのではなく、アンゲルウルプ方面に戦線そのものを押し上げるのです」

ルポレットの説明を聞いて『ワーム』は頭に地図を描いてみた。

今のところ彼の軍勢はメルクス跡の次元穴を中心に同心円状に蹂躪しつつ制圧地域を広げている。

それを停止させて、アンゲルウルプ方面に大隊規模の軍勢を並べて、

各部隊に相互援護させながら侵攻する作戦をとる、というのがルポレットの言わんとするところだった。

「他の戦線は諸族の者達に任せましょう。

実際には何の力もないとはいえ、求心力らしきものを持つのはアンゲルウルプのみです。

ここを陥落させれば、『天使王国』の諸侯は結束する理由そのものを失い、各個撃破する事が可能になるでしょう。

主力を向かわせるに足る作戦だと思いますが」

「・・・こだわるねえ」

「野放図に、無目的に占領地を増やすだけの戦争というのが、どうにも納得できないものでして」

「簡単でいいと思うけどなあ」

「方が一、敵が有効な反撃を行った場合、我々は広く薄く部隊を展開させる事になります。

いかにテツラムリア在住の者たちよりも我々悪魔の個体戦力が高くとも各個撃破される危険があります。

そうなつては收拾がつかなくなるでしょう」

「一気に戦線崩壊？」

「その危険が高いと思います。本当は、『天使王国』の制圧が五割も進めば、そのまま何も建策しないつもりでいました。半数を抑えてしまえば敵も反撃する力を結集できないと思いますから。

しかし現状は三割占拠で組織的な反撃を受け、軍団長を一人失いました。

あまり楽天的に構えない方が良く判断しますが、どうでしょう？」

ルポレットに問われて『ワーム』はしばらく難しい顔で考え込んだ。

が、それは一瞬の事だ。次の瞬間にはもう考えるのはやめていた。

「その様子だと、アンゲルウルプ攻めの指揮官まで 決めているんじゃないの？」

「ウロトスを使います」

「軍団長じゃなくて傭兵隊長を？」

「正規軍を扱う事しか慣れていない軍団長では、寄せ集めの諸族の大軍を上手く扱う事はできません。傭兵とは報酬で寄せ集められた存在ですが、それだけでは兵は動かないものです」

「そんなもんかねえ」

「そんなものらしいです」

狡知と力と秩序をモットーとするのが悪魔だ。傭兵とは報酬で集まるものであり、軍隊とは秩序が支配する世界である。そう理解している『ワーム』には、それ以外の理由で兵士が動くと考える方に違和感があった。

『ワーム』に説明するルポレットにしても、実際に軍を指揮した経験のない、机上の策士と言われても仕方のない悪魔だから伝聞で聞いた事を言っているだけなのだろう。

しかしそれでも『ワーム』がルポレットを使う理由は他にあった。ルポレットは話を続ける。

「当面の戦略変更は、問題がなければこれで行きたいのですが、もう一つ、閣下にお願いが」

「ルポレットのお願いって、ドキドキするんだよねえ・・・でもいいや、言ってみて」

「恐縮です。では・・・そろそろ諸君主方への報告を始めませんか？テラムリアの現状と主戦線の情報、そして方が一の時の援軍の為に」

「えー！確かに軍団長一人失ったし、上級悪魔も八人やられちゃったけど、

全体的に見てこちらの優勢は揺らいでいないよ？組織的な反撃はケルマダイク一ヶ所のみだし、そこも決定的に戦線が崩壊している訳でもない。諸君主方に泣きつくような状況じゃないでしょう？」

どうしても着服した何十万という魂を我が物にしたい『ワーム』は不満げにぼやいた。

迂闊に地獄の諸君主と連絡をとって大量の魂をガメている事がばれたら、

一体どんな嫌がらせを受けるか知れたものではないからだ。

嫌がらせどころか致命的な陰謀を仕掛けてくる可能性すらある。

悪魔は天使だけでなく味方である筈の悪魔にも警戒を怠ってはならなかった。

しかしルポレットは『ワーム』のぼやきぐらいで怯むような玉ではなく、

そもそも感情らしいものを露にした事が皆無に近いのだが、今回も淡々と言葉を続けた。

「決定的な戦線の崩壊が起きてからでは、足元を見られて吹っかけられるのがオチですな。

先ほども言いましたように、力任せの征服で『天使王国』の五割を制圧する事ができれば、何も申し上げるつもりはありませんでした。

一つの世界の過半を手中に収めれば、その世界は自力では有効な反撃策を取れないからです。封鎖して天使側の助力や援護を遮断すれば世界一つを取れます。

しかし現状、三割確保したところで精鋭兵力の約五分の一を失う事になりました。

兵卒や下士官級の被害が目立ったほど出ていないようですので、数の上では問題ないでしょう。しかし上級悪魔たちは軍団の要です。

彼らの五分の一を失うと言う事は、軍団の五分の一が有効に機能しなくなる事を意味します。

私は、閣下が私のような比較的非力な悪魔を、何故側近くに置き使っているのか、考えた事があるのですが、自分なりの推測を述べさせていただければ、私が用意周到な悪魔だからだと考えております」

実のところ非力な、というルポレットの自己評価は控え目に過ぎる。

彼の本領は魔法能力であり、その呪文行使能力は『天使王国』の高位魔術師たちに匹敵するだろう。だが悪魔たちは押しなべて対魔法防御に優れている。

真つ向から戦ってルポレットが上級悪魔たちに勝てるかどうかは、正直疑わしい。その意味では、彼は非力かも知れない。

階級社会の地獄とはいえ、ルポレットの立場は『ワーム』の顧問であり、

軍団長はもちろん上級悪魔たちにも直接指示する権限はない。

にも関わらず諸族を集め、軍勢を組織し、『ワーム』には事後承諾の形で戦略を展開しても、表面的には異論は出ていない。何故か。

それはルポレットという悪魔の能力によるかということによってよかった。

「私は、考えられる限りのアクシデント全てに対処できるよう備えております。

その為に、私が関わった策謀、作戦はいずれも決定的な破綻を起した事はありません。

閣下は、それを買っておられるのだと思います」

「・・・まあ、そうなんだけども」

しぶしぶ『ワーム』は認める。

「主戦線に配下の軍団をより多く回している諸君主方からお声をかけていただいて、

我々が行っている陽動作戦の意義を説き、火急の際には援軍を送っていただく手筈を用意すべきです。

弱味を見せた瞬間、高く売りつけて知らん振りするという手は、閣下ご自身が多用されたではありませんか」

己の所業を思い出して、再び『ワーム』はうなずくしかない。

「順調な折に協力を求めるといふのは正攻法です。相手も素直に応じる事ができるでしょう。

閣下には何卒、その重たい腰をあげていただきたいものです」

「うー、少し嫌味が入っていない？」

「そう感じられるのはご自分の行動に疚しいところがあるからではありませんか？」

言われて『ワーム』は言葉を失い、まるで教師にやりこめられた生徒のように不服顔で寝転がっている。

「解りましたよー。何人かの君主方には渡りをつけておくからさあ。それでいいんでしょう？」

「よろしく願いたします」

ルポレットは丁寧な頭を下げ、引き続き諸族の軍勢募集と編成を行うと告げ退出していく。

丸くなった『ワーム』はその後ろ姿に舌を出してみせた。失われた上級悪魔たちは確かに痛い。

だが敵から戦略級の打撃を受けた訳ではない。

ルポレットの主張も理解できたが、はつきり言えば『天使王国』の軍勢はまだ何処にも集結した姿を現していない。敢闘しているのは王国都市ケルマディクの防衛だけなのだ。

「確かにそれがルポレットのいいところなんだけどさあ、あんまりにも備えすぎだよね。」

我が軍団は絶好調だし、諸族の軍勢も順調に我が元に集結している。問題なんて何処にもないよねえ……」

『ワーム』はルポレットの進言は聞き入れた。だが何時実行するかは『ワーム』の胸先三寸で決める事だ。いくら自由に進言する権利を与えても、決定権までは譲れない。

「まあ、今のところは、果報は寝て待てよ」

そう呟くと『ワーム』は再びうたた寝を再開した。怠惰な昼寝こそが唯一の仕事であるかのように。

ケルマデイクは沈んでいた。ポルメリアの参戦によりカプノーザを初めとする三体の上級悪魔を滅ぼし、悪魔の攻勢を撃退したものの、敵の包囲を破った訳ではなく、また破る戦力もなかった。

まる一日の攻防に疲れ果てて逆襲に打って出なかった事がケルマデイク指導部には悔やまれた。

カプノーザの戦死、一端の撤収で混乱し、指揮権を巡る争いを悪魔側は一日で終結させたのだ。

戦力の再編を行っていたのはケルマデイク側も同じだったが、

眠る事を必要としない悪魔の方がケルマデイク側よりも手際が良かったと言う事か。

必死の攻防戦を戦った翌々日。ケルマデイク側は自分たちが今までの倍以上の悪魔たちに包囲されている事を知った。

戦略的にはルポレットが分析した通り、広く速やかに制圧する事を目的にしていた悪魔側の作戦は修正を余儀なくされ、この方面の悪魔の侵攻はケルマデイクで事実上ストップする事になる。

だが包囲されているケルマデイクにとっては何の慰めにもならない事だ。

援軍を求める使者を戦いの翌日に再度送り出したが、彼らが帰還する事は望めそうもない。

アンゲルウルプの諸侯会議に出席している面々が、そのまま会議に参加している諸侯に援軍を送るよう働きかけを行っているが、それも芳しくないとの連絡が届いている。宰相大公フォリヴァスを総指揮とし連合軍を結成する事では一致しても、その後の戦略が未定で、ケルマデイクに貸し借りのある諸侯でもすぐさま返事をする事ができない状況らしいのだ。

戦略的には籠城を続けるより他にない厳しい戦況だったが、ポルメリアの来援は戦場で戦う者たちには希望をもたらししていた。何せ彼女は、最初の突撃で上級悪魔を一撃のもとに屠り、軍団長カプノーザも激闘の末に倒している。

その後も猛威を振るう上級悪魔一体を倒し、つまりあの日ケルマデイクが悪魔の猛攻を凌ぐ事ができたのは、単にポルメリアの活躍によるものだったのだ。

その後、悪魔側が混乱を鎮め、体勢を立て直してケルマデイク包囲を嚴重に展開しても、最前線の兵士はもとより騎士たちの士気は衰えなかった。

圧倒的な暴力の化身、絶望的なまでの身体能力の差、

それらを見せ付けられていた上級悪魔でも戦いようによつては倒せる事が証明されたのだ。

カプノーザと二体の上級悪魔はポルメリアが倒したものだだったが、

もう一体は重装騎兵の突撃や魔法使いの呪文攻撃で何とか仕留める事ができた戦果だ。

いざとなれば上級悪魔を滅ぼす事が自分たちにもできる。そしてポルメリアは『悪』を滅ぼす善なる軍神の使徒だ。

今まで忘れかけていた事実に兵士たちは気づき、彼女は諸手を上げて歓迎された。

誰もが彼女を肴に、得られてもない勝利の美酒を味わおうとしたのだ。

ポルメリアが固辞して孤児院へ密かに向かわなければ、戦いの最中で大宴会を行われていたかも知れない。

ポルメリアが戻った孤児院は、相変わらず大地の女神と竈の女神の祭祀官たちに守られていた。

しかし中にいるのは元いた孤児たちばかりではなかった。

ケルマディクまで逃げ延びる最中に親とはぐれた子、戦いの中で親を失った子供たち、いや、子供ばかりではない。家を焼け出され、傷ついた人々の避難場所はいくらあっても足りない。

万神殿の敷地内はそういった傷ついたり戦いの手助けができなくなった非戦闘員で溢れていた。

それでも、竈の女神の女祭祀長は両手を広げて彼女を迎え入れた。

「まあ、まあまあポルメリアさま、よくぞご無事で。今日は本当にご苦労様でした」

「ただいま戻りました」

汚れた顔ではにかみながらポルメリアは祭祀長に言う。

何の事かしばらく気付かなかった祭祀長は、やっと前に自分が言った事を思い出したようだった。思わず吹き出しながら応じた。

「お帰りなさいまし」

「皆無事なんですか？」

当然のポルメリアの問い。祭祀長の顔色は曇った。

「子供たちは無事です。しかし兵士達の救護を手伝いに行った祭祀たちのうち、何人かは戻ってきていません。

それに、親を亡くした子、子を亡くした親、悲劇は増えるばかりですわ」

「そうですか」

「でも、ポルメリアさまはこうして戻られたのです。悲しい中にも喜びはありますよ。

それにディエスも戻ってきてくれたのです。会われましたか？・・・と、ごめんなさい。そこにいたのね、ディエス」

何もせずともポルメリアは淡い光を放つ。日が暮れて乏しい灯火で人々は働いている。

光を帯びたポルメリアの影にディエスがいるとは、祭祀長は思わなかった。

「いいんです、祭祀長さま。それよりポリーに早く休んでもらいたいです。

アングルウルプから直行して、そのままさつきまで戦い続けてくれたのですから」

ディエスは自分に気付かなかった祭祀長に文句も言わず、ただポルメリアをここに連れてきた理由を簡潔に述べた。そして続けてこういうと、すぐに立ち去ってしまったのだ。

「じゃあ、僕はこれから怪我をした兵隊さんたちのところに行かなくちゃならないから、これで。

ポリー。今日は本当にありがとう。明日もまた、ここで戦ってくれるよね？よろしくね」

ディエスの振る舞いは奇妙に明るかった。しかしそれは人々の世話で疲れた祭祀長、

戦いに疲れたポルメリアを思いやっつての事だと二人は気付いていた。彼が立ち去った後、ポルメリアは思わず呟いた。

「立派になりましたね」

「そうですね。彼は歌う事が大好きで、ただそれだけで吟遊詩人の弟子になりました。

どちらかというと大人しい、引っ込み思案な子でしたけど、あの年頃の成長は早いわ。それは貴女もですけど。ポルメリア卿」

意外な事を言われて彼女は驚いた。

「私が、ですか？」

ポルメリア自身に成長した自覚などなかった。

ただ無我夢中で戦い続けて、誰を助ける事もできなかった後悔の多い日々だった。だが祭祀長は首を振る。

「成長した、というよりも吹っ切れた、という方が正しいかしら。

前に会った時の貴女は、いつも迷っていらつしやった。そんな気がするの。

でも今の貴女は、何だか晴れ晴れしていらつしやる。・・・ごめんなさい。学のない女だから、上手い言葉が見つからないわ」

だが祭祀長の言う事は理解できた。確かに彼女は吹っ切れたのだ。

いや、もはや躊躇う事無く全力で戦う事のできる『悪』に直面して、

悩む事無く剣を振るう事を喜んでいるのかも知れない。

そう思うと自分がいかに単純で幼稚なのかと恥ずかしくなる。

彼女の言うとおり、祭祀長は大商人の妻であり子供たちが成長するまでは家の中の仕事ばかりしていて外の世界を知らずにきた。

息子たちが独立して孫も生まれるような歳になり、

家の中の彼女の仕事が息子の嫁に肩代わりされていくにつれて外の事に興味を持ち、

寵の女神の祭祀を引き受けるようになったのだ。

祭祀長など務めているがただ単に祭祀の中で一番歳かさであるからに過ぎない。

けれども大店の女将として彼女は多くの使用人たちを取り仕切ってきた。人を見る目はある。

「今はそれが救いね」

「は？」

「だって、貴女のような方に活躍していただければ、私たちはあつという間に悪魔に殺されてしまうわ。

比喩ではなく現実というのが、私などには実感が湧かない事なのだけれども」

「そういつていただけると、気が楽になります」

「明日から、どうなさるおつもり？」

「どう、とは？」

「私なんかでは良く解らないのだけれど、

戦争をするにも段取りとか必要なんでしょう？貴女は飛び入りでいらつしやったし、

街の評議会も貴女の取り扱いに困っている事でしょう。私の夫と息子が評議会に関わっていますの。

そちらから貴女の事をお知らせしても構わないかしら。

貴女には貴女の考えがあるかも知れないけれど、ケルマディクはケルマディクの評議会が街の防衛を考えてくれます。

もちろん貴女に他に何か考えがあるなら、問題ないのでしようけれども」

「いえ、お願いできますか？私の力をケルマディク防衛に役立てていただきたい。

その為にここに来たのですから。あの子たちやあなた方を守る為に、私は来たのですから」

正直なところ、天使の眷属たるポルメリアは体の疲労など感じないのだから、

戦いが終わった後に評議会なり司令部なりに赴けば良かった。

だがデイエスに言われて、孤児の子供たちの安否が気遣われて、ついここへ来てしまった。明日からどうしようかと頭を悩ませていたのも事実だ。

「それは良かったわ。明日にでも息子に人をやって迎えに来てもらいましょう。今日のところはお休みになってください。子供たちは皆大部屋にいます。戦いの最中だから外に出られなくて、退屈していると思うわ」

祭祀長は場違いな事をいい、喉を鳴らして笑った。

「退屈・・・ですか」

「最初は遠くから聞こえる咆哮や叫び声に怯えていたのだけでも、幸いな事にはここは一番奥まった場所にあるでしょう？神々の加護もあるし、怖い声は風につれて聞こえてくるけど、他には何もなし。もちろん、戦いで傷ついた人や、亡くなった人たちが毎日運ばれてきますけど、子供たちは慣れてしまったようですわ。悲しいけれども、この場合はそれが救いです。ただ外には出られないので、皆元氣を持って余して退屈しているのですよ。お手伝いできない小さな子供たちほど、ね」

「じゃあ、僭越ながら、子供たちの無聊を慰めに参りましょう。私でよければ」

「お疲れのところ申し訳ないのだけでも」

「私の疲れは体の疲れじゃないんです。私のは心の疲れです。だから子供たちに会うのは、何よりの特効薬なんですよ」
「そうおっしゃっていただけるとありがたいわ」

祭祀長と別れ、ポルメリアはさして広くない、薄暗い孤児院の中を歩く。

孤児院に収容されている人々は、疲れ果てた難民や戦火で親を失った子供が多いようだ。

あるいは昼間の攻防戦で疲れ果てているのか、多くの人々は粗末な毛布に身を包み、身動きすらせずに眠りにについている。その中をポルメリアは、その身から発する淡い光に包まれて、ゆっくりと音を立てないように歩いていく。

夢うつつに目を覚ました人などは、幽霊か天使かと驚いているようだった。

ある者は恐れ、ある者は拜んでいる。ポルメリアはその一人一人を安心させるべきだったのかも知れない。だが彼女は十六歳の少女に過ぎない。彼女は彼女の望みを優先させた。

大部屋を覗き込む。普段は男の子と女の子に別れて眠っているのだが、今は非常時という事で子供たちは皆ここに集まっている。

ポルメリアが中の様子を窺った時、目敏い誰かが叫んだ。

「あ、ポリーだ！」

うたた寝をしていたらしい子供たちも何人か目を覚ます。ポルメリアは微笑んで、人差し指を唇に当てた。

「静かに。皆休んでいるんだから。ところで、私もお邪魔していい？」

目を覚ました子供たちは委細尋ねる事をしなかった。

ただ思わぬ彼女の訪問に喜び、

そして仲間たちの中でたまたま目を覚ましていた自分たちだけが彼女を独占できる事に優越感を抱いたようだった。

彼女を見つけた年長の女の子が囁くように言った。

「どつどつぞうぞうぞ。おこしになって下さい。私の隣なんていかがですか？」

少女とボルメリアはくすくす笑いながら並んで座った。それに気付いた子供たちが二人を囲みだす。

「あらら、起しちゃったかな」

「大丈夫よ。小さい子は退屈で寝ているし、私たちは大人の手伝いで疲れているし、だからポリーと一緒に眠れるのがうれしい。ねえ、私達を守りに来てくれたの？」

「そうよ。皆とこの街を守る為に、私はやってきたの」

「わあ、素敵ね。皆でお祈りしていたの。ポリーが私達を守ってくれるようにって。きっと、そのお祈りが届いたのね」

ボルメリアはアンゲルウルプではなくケルマディクを選んだ経緯を思い出し、アンゲルウルプで誰にも省みられずに死んでいる子供の事を思い出した。

「・・・そうね、そうかもしれないね」

少女は幸福そうに笑い、ボルメリアは苦い光景を打ち消すように笑った。

私は今、ここにいる。だからこの子たちをあの見捨てられた子のようにほしくない。

子供たちの日向の匂い包まれて、ボルメリアは幸福だった。この幸福を私は守るのだ。彼女はそう確信していた。

翌日の午前中、祭祀長からの知らせを受けてなのか、やや慌てた様子でケルマディク政庁より使者が訪れた。

前日の戦いの後、姿を消したボルメリアをずっと捜していたのだと使者は言う。

孤児院の子供たちの安否を確認したボルメリアも政庁へ向かわない理由はない。

使者の案内で彼女は外見だけは何度も見た事のある政庁へと歩いていった。

こう言っては何だがボルメリアが予想していたよりもケルマディク市民の顔は明るかった。

彼女はそれが彼女自身のせいである事を理解していない。

人々が前向きに配給の食糧を配ったり受け取ったり、城壁を直すために家屋敷の塀などの煉瓦を運んだり、怪我人を労わったり、彼らはまだ希望を失わず、包囲戦を戦い抜く気概を見せている。

それが上級悪魔を一撃で倒しカブノーザを殺したボルメリアの、最大の戦果だった。

心くじけていた人々の胸に希望の灯火を再び灯したのだから。

彼女が通り過ぎた後、人々がボルメリアに気付き、嬉しそうに指さしている事に彼女は気が付かない。

ただ今後の戦いを戦い抜く為の相談をケルマディクの人々と決めなければならない。彼女の頭の中は、それで占められていた。

政庁に辿り着いたボルメリアが案内された部屋には、数人の男たちが会議の真つ最中だった。

いずれも壮年から老年の男たち。

富裕商人たちによる合議制をとるケルマディクは経験を積んでいない三十歳以下の者を政治に参加させないし、また互選と言えども選挙の洗礼を受けなかった者を重要な役職につける事もしない。

部外者とはいえ、十六歳の少女でしかないボルメリアがケルマディク政庁の会議室に入る事自体、異例の事だった。

「ポルメリア・ランキンと申します。お話があると伺いまして参上しました」

彼女は遙か辺境とはいえ広大な領地を持つ侯爵家の令嬢であり、自身もランキン侯爵から授けられた騎士号を持つ貴族だ。『天使王国』内のヒエラルヒーを厳密に適應すれば、彼女の宮廷順位はこの部屋の誰よりも高い。

だが実際にはケルマデイクの支配者は彼らであり、ポルメリアは流浪の騎士に過ぎない。彼女はでしゃばらず入り口近くに佇んだ。

「おお、よくぞおいで下さった、ポルメリア卿。昨日のご助力、ケルマデイクを代表して礼を申します。卿に加勢いただかなければ、今頃ケルマデイクは悪魔たちに蹂躪されていた事でしょう」

立ち上がりにこやかに挨拶したのは一番上座に座っていた、恰幅の良い髭面の男だった。愛想も良い。目の下に隈ができています。最近良く眠れていないのかも知れない。

「私はケルマデイク防衛委員会の長を勤めるレーヴェンスと申します。

いや、昨日は慌てましたぞ。戦いの後、一番の殊勲者の姿が消えてしまったのですからな。幸いにしてクラテン殿の細君から居所を教えてくださいまして、こうしておいでいただいた訳ですが・・・」

レーヴェンスという委員長の右手に、もみ上げに僅かな白髪を残し、後は眩いばかりに禿げ上がった男が座っている。彼はポルメリアを見て目礼だけしてきた。彼が寵の女神の祭祀長の、夫であるらしかった。

「卿が寵の女神神殿が運営している孤児院にご縁がある事は聞いております。その上でケルマデイク防衛にご助力いただけるとの事、誠に感謝に堪えません。

それで・・・我々の指揮下に入っていただけのですな？」

防衛委員会の面々が危惧しているのは、高貴な生まれで、しかも『正義馬鹿』も名高いポルメリアが、昨日の武勲を引っさげてケルマデイクの指揮系統に割り込んでくる事のようなのだ。

彼女にも委員会の心配は理解できた。

ともすれば華々しい戦果ばかりに目が向くが、戦いで重要なのは、そればかりでなく補給であり支援も、なのだ。

委員会を構成する人々は皆富裕商人である。若い頃なら旅から旅へ、交易と冒険の日々を送っていたかも知れない。政庁の仕事を行うようになって、ケルマデイクの防衛や侵略行為に参画したかも知れない。

『善政』に定評のあるケルマデイクである。コネばかりの未熟な人間を重要な役職につける事は、まずない。彼らはケルマデイク防衛を全て管理運営していた。

前線の兵士、指揮官、後方の補給、治療、その他諸々の雑役、全ての関係を調整し、戦略を立て、戦っているのだ。

優れた戦士と名高いといえども、何も知らない小娘にしゃしゃり出られてかき回されるのは迷惑なのである。その事を釘さしにきたのだろうか。

もとよりポルメリアにもその気はない。彼女は前線で戦うしか能がないと、自分の事を理解していた。

「勿論です、委員長閣下。私を前線の激戦区に投入して下さい。『悪』との戦いが我がさだめ。この街を守る為に、どのようにも剣を振るいましょう」

ポルメリアの言質を取り、比較的歳若い委員達は安堵の溜め息をついている。だがレーヴェンスやクラテンを始めとする比較的歳を重ねた者たちの態度は変わらなかった。

「卿に何か方策がおありですか？現在のケルマディクは悪魔の軍勢に攻められています。昨日の戦いで悪魔たちは怯みました。今朝方、我々は間髪入れずに情報を携えた援軍を求める使者を多数走らせました。しかし昨日の戦いで悪魔たちに打撃を与える予定の精鋭部隊は消耗が激しく、彼らが回復するまでこちらからは攻勢に出れない状況です。」

貴女が指揮官ならば、どう動きますか？」

指揮権を侵害するなどと言った端から、指揮官だったらどうすると尋ねてくる。普通の武人、ことに貴族ならば不愉快な事だろう。

彼らは戦う事を名譽であると考え、自分と自分の家門の誇りの為に戦うのだから、指揮官として迎える事を拒絶しながら意見を求めるなど、自分本位も甚だしい。

だが知ってか知らずか、ポルメリアは機嫌を損ねる事もなく、ただ淡々と思うところを述べた。

「ただ城壁と魔法陣を当てにして立て籠もり続けるのでは、早晩、準備を整えた敵に圧殺されてしまうでしょう。大規模な攻勢に出る必要はありませんが、小競り合いで敵を煩わせ、尚且つ敵の戦力を探るべきです。その一隊は私が引き受けましょう。一当たりして帰還すれば良いことですから」

「お願いできますか？」

「是非とも」

レーヴェンスは微笑み、ポルメリアはその足で戦場へ赴く。

委員会の面々は安堵の溜め息を漏らして彼女を見送った。

ポルメリアは委員会の命令に従って戦う『駒』となる事を了承したのだ。

ランキン侯爵を始めとするケルマディク以外の勢力の手先として動き回る事はないだろう。委員の大半はそう思い安心しているのだ。

だが微笑み浮かべながらレーヴェンスはクラテンに尋ねた。

「どう思う？アンゲルウルプの会議に出席している者たちからは、

ランキン家の者だけでなくフォリヴァス公や都市魔術師のフィスエシルとも親しく会合していたというが・・・」

「彼らの影響下に『城皆落とす』があるのか？」

その可能性は否定できないだろう。特にフィスエシルとは寝食を共にしたともいう。

あの二百年生きたエルフと天使の合いの子が、

人垂らしで有名なのは知っているだろうか？あんな初心な娘が垂らし込まれない筈はない。そう思えないか？」

「だとして、今の我々に何のデメリットがあるかね」

微笑を絶やさないレーヴェンスに比してクラテンは無表情を変えない。レーヴェンスの疑問に冷静に問い掛ける。

「今の我々には関係ない。悪魔どもに囲まれて逼塞状態だ。何もできない。」

だが事態が好転して包囲戦から解放された時、

彼女は我々の自由の行動を制肘する事になるのではないかね？戦力として彼女は貴重だ。

彼女の活躍なくしてケルマディクは生き残れまい。

だが死力を尽くして戦った後、『天使王国』を、いやアンゲルウルプを救う為に更なる犠牲を彼女から求められたら、

我々は拒めるかね？我々には何の利益にもならない、フォリヴァス公に『天使王国』の王冠を授ける戦いだ」

微笑んだままレーヴェンスは取り越し苦労ともいえる懸念を口にした。しかしありえない事ではない。

ケルマディクは自分たちが生き残る為に戦っている。

だが迫る危機を脱した後で『天使王国』全土から悪魔を撃滅する名目で、アンゲルウルプから更なる軍役を要求されるのは確実だ。

ケルマディクの間人としては、それは正直迷惑な話だった。今も援軍ナシでケルマディクは戦い続けている。

何もしてくれない、遠いアンゲルウルプを救う為に何故戦わなければならないのか？我々は死力を尽くして戦っているのだ。これ以上の犠牲など払えるものではない。それがケルマディクの商人たちの本音だ。

レーヴェンスの言葉を耳にし、そしてクラテンとのやり取りを目にして安堵していた委員達に再び緊張が走る。

目の前の危機を乗り越えた後にやってくるだろう、アンゲルウルプの『無理難題』をどうするのか。そういう話なのだ。

だがクラテンは相変わらず無愛想なまま口を開いた。

「そうなたらそうなた時に考えれば良いではないか。

生き延びる事ができるかどうか、まだ解らぬうちに先の事を考えても仕方あるまい。

それに、もしアンゲルウルプから援助を求められても、厄介事というよりも絶好の機会と考えても良いだろうか？」

「未来の王を援助してやる、という事か」

「それに見合った特権と引き換えにな。

あちらも『善なる行為』や『正義』で全ての物事が動くとは思っていないだろうし、

それに『城砦落とし』に対して引け目を感じる事はない。

我々は、彼女がくるまで自分たちの都市を立派に守っていたのだ。恥じるどころは何もない。

我々にはケルマディク市民を守る義務がある」

「まあ、確かにそうだな。・・・そういう事で、方々、よろしいですな？」

レーヴェンスは視線をクラテンから他の委員にいきなり移して話を振った。

ケルマディクの防衛委員会とはいえ、寄り合い所帯である。

誰もがケルマディクの自主独立を願っているどうか、それは解らない。

外部勢力と結託して自分の立場を強化したり利益を得ようとする者もいるだろう。

レーヴェンスとクラテンは個人的な話し合いに見せかけて、委員会全員に自分たちの結論を伝えたのだ。

例えアンゲルウルプから命じられたとしても無条件に応じる事はない。

ケルマディクはケルマディクの利益を守ると宣言したのだ。何人かは当然どうなづき、何人かは少しばかり慌てていた。その慌てた面々の顔と名前を、レーヴェンスもクラテンもしっかりと心に刻みこんでいる。

クラテンは自分の妻からボルメリアが一体どういう娘であるかを聞き知っている。

純朴な彼女が、こんな狐と狸の化かしあいを利用されたら、どんな顔をするだろうか、想像した。

だがそれは全て彼の心のうちの話だ。彼が笑った顔など彼の妻以外にはほとんど見た者がいない。

彼の苦笑は彼の胸のうちだけに収められた。

自分の訪問を身内への牽制に使われた事など、ボルメリアはまったく気付かなかった。

彼女の興味はいかにしてケルマデイクを守るか、であり、その為に自分の『悪』を殲滅する力は使われるべきだと信じていた。戦いの裏側に常に存在する味方同士の綱引きになど、ポルメリアは係わり合いになりたくない。だから政庁を出た彼女は案内を申し出る者を無視して城壁の状況を自分の目で確かめる事にした。

ケルマデイクを囲む城壁の中に、都市を魔法的に守る魔法陣が刻まれているのは悪魔たちも承知している事だ。だから彼らは一端突破口を開いた城壁を、執拗なまで破壊しようとしている。

ケルマデイク側は魔術師の指示に従ってそれを必死になって補修しているが、人手も材料も足りていないのが実情だ。城壁の向こう側を窺えば、悪魔の群れは遠巻きにケルマデイクを囲んでいても、あちらから攻めてくる様子はない。軍団長カプノーザ戦死後の主導権争いがまだ収まっておらず、

ケルマデイクに立て籠もる数万人の魂という報酬目当て戦線を維持しているというのが本当のところだ。内部での争いは激しくなっているだろうが、城壁内から見ると、悪魔の陣営は不気味なほど静まり返っている。

ポルメリアが通りかかる度に、人々は手を止め、汗を拭い、あれが昨日の戦いの殊勲者だと囁きあう。少しでも愛嬌があるなら手を振って人々に応えるだろうが、彼女にはそんな余裕がない。

それを見て、お高く留まっていると毒づく者もいれば、一生懸命やっているのだと彼女の歳を考えて好意的に見る者もいる。だがその全てが彼女の目には入らなかった。

彼女の頭には、どうやってケルマデイクを生き延びさせるのか。それしかなかった。

彼女が足を止めたのは、昨日彼女自身がカプノーザと激しく戦った付近の城壁だった。

悪魔の主力が襲い掛かっただけに城壁の損傷は酷く、穿たれた隙間を瓦礫ではなく、魔法陣を描いた城壁で埋める事は当分不可能ではないかと思えた。

ならば、ここがいいだろう。

ポルメリアは一人うなずくと、今度は足を負傷者が集まる治療所へ向けた。

医学の神の神官はもちろん、仕える神々を問わず、治癒呪文が扱える神官、僧侶や吟遊詩人、市井の薬師に至るまで、ありとあらゆる傷を癒す事ができる業種の人々が、戦いに傷ついた人々を癒している。

呆れながらも案内人がついてくるのだが、ポルメリアは彼に帰れとも何とも言わずに、一人で各地の治療所を見て回った。しかし怪我人を力づけるとか、神官達を労うとか、そんな事は一切行わなかった。

誰かを探しているようで、その人物がいなければ誰にも何も言わずにすぐに立ち去っていつてしまう。

ポルメリアとしては自分が声をかけて仕事の邪魔をしてはならないと考えているだけなのだが、声をかけられると曖昧に微笑むか、あるいはまるで耳に入っていない彼女を見ると、

案内人は元より人々の訝しげな視線は止まらなかった。

彼女がようやく目的の人物を見つけたのは昼下がりの頃だった。

「ディエス！食事中？」

「ポリー、どうしたの？」

「ディエスに少し手伝ってもらいたいの。できるっ。」

ディエスは言われて傍らで同じ様に休憩している薬師たちを見る。

午前中一杯、彼らとともに怪我人の世話をしていたらしい。薬師たちはにやにや笑いながらうなづいてる。

彼らのその態度を見てディエスは首を傾げたが、解らない事は気にしない事にした。

「何をやればいいの?」

「昨日のように歌って欲しいの。歌うだけでいい。後は私がやるから」

「それって・・・ポリーが戦いに行くってこと?昨日の今日で!悪魔はまだ攻めてきていないでしょ!？」

「そうだけど、相手が休んでいる間に、こちらが休むというのは能がないわ。

私だったら大丈夫。軍神のご加護で疲労を感じないの」

それは呪いではないのかと一瞬ディエスは思ったが、目の前のポルメリアは妙に明るい。

吟遊詩人を志す前のディエスは、他の子供たちと同じ様にポルメリアの事を一緒に遊んでくれる『騎士様』としか考えていなかった。だが吟遊詩人を目指し、歌を歌い、物語を覚えていくにつれて、彼女が時折見せた影のようなものに気付いた。

ディエスはそれを疲れだと思い、彼女の過酷な旅を思いやったものだ

しかし、今日の前の彼女にはそんな影がない。それどころか昨日は気付かなかったが、どこかはしゃいだ様子さえある。

「どうしたの?何かあったの?」

心配そうにディエスが問う。だがポルメリアは反対に問い掛けた。

「何かって何?」

「・・・何だかポリー・・・こういったら何だけど、嬉しそうに見える」

「え、そんな風に見える」

「うん」

「そっか。たぶんそれは・・・私は、ようやく自分がやるべき事を悟ったからだと思う。

今までの私はいつも迷っていたし後悔していた。でも今は違う。後悔はすると思うけど、でも、迷う事はない。

私は、どうして私が軍神に捧げられ、天使の眷属になったのか理解したの。

全ては、この為なのよ」

「・・・この為・・・」

清々しい様子のポルメリアとは違い、ディエスは釈然としない。だが美しく微笑む彼女にこう言われれば、彼に断る理由はない。

「だから歌って欲しいの。私の為に、昨日の、戦いの歌を」

「昨日の今日で出撃するなんて話、どこからも聞いていないけど」

「ケルマダイクの防衛委員会も承知の話よ。私一人で打って出る」

その言葉を聞いてディエスは青くなった。

「そんな無茶だよ！何百人もの部隊が出撃しても半数も帰ってこなかった事だってあったんだよ。いくらポリーが強くても、あの悪魔の群れと戦って勝てる筈がないよ」

だがポルメリアは平気なものだ。

「勝つつもりはないわ。ちょっと引つ掻き回して、それで帰ってくるから。ただそれだけの事よ」

「でも、なんでポリーがそんな事を・・・」

「今、ケルマデイクに悪魔とまともに戦える部隊がないから。私だけが連中と戦える戦力だから」

絶句したデイエスだが、確かにそのとおりだった。昨日の戦いで傷ついた精鋭部隊が回復するには数日かかる。普通の騎兵を斥候に出したところで悪魔の餌食になるだけだ。

善なる軍神の使徒であり、『悪』と戦う為に存在する天使の眷属であるポルメリアこそが、威力偵察をするに相応しい。

頭では理解している。でも感情が納得しない。

孤児院出身の子供たちは例外なくポルメリアが大好きだ。例え無敵の騎士であろうとも、一人で危険な場所に行つて欲しくない。それが黙り込んだデイエスの顔色に出たのだろうか。ポルメリアは困つたような顔をした。

「これは貴方たちを守る戦いのよ。街の皆を守る為なの。

それでもダメかな？デイエスの歌を聞くと、いつもよりも体が動くの。

いつもよりも上手く戦える。だから歌つて欲しい。ダメかな？」

ポルメリアの藍色の瞳が、清冽で厳しいものではなく、躊躇いの色に染まっている。

フィスエシルやフォリヴァス公が見たら、驚くと同時に喜ぶこと請け合ひの珍しい表情。

デイエスは溜め息を一つついた。そんな顔をされたら、断る事はできない。

「・・・解った。歌うよ。楽器を持つてくるから待っていて」

武勲の歌をデイエスが歌う。

ポルメリアはその旋律を体一杯に受け取ると、すぐさま臨戦態勢となり、その足に履いた魔法の靴を起動させて空に舞い上がる。瓦礫と化した城壁を飛び越え、矢の様に悪魔の陣営へ一直線に飛び込んでいく。

そこで何が行われているのかは遠くから聞こえる音を耳にするだけで十分だった。

形容しがたい咆哮や雄叫び、悲鳴のようなもの、乱闘の激しさ、訳のわからぬ罵るような音が轟く。

そして悪魔の陣営地から次第にこっちへ砂煙が迫ってくるのが見えた。

地表すれすれを飛んでいるポルメリアに追いつがろうと、何体もの悪魔が飛来してくるのが見える。

砂煙の向こう側で銀の光が煌く度に、悪魔たちは一体、また一体と数を減らす。

それでもまだポルメリアの銀の光の周りには、禍々しい極彩色の悪魔たちが何体も舞っていた。

デイエスは歌を変えた。ポルメリアだけに力を与える武勲の歌から、

彼の周りで様子を窺っている兵士達にも力を与える勇気の歌に。

兵士達の何人かが、魔力の与えられた矢束を運んできた。

次の決戦に備えて鍛冶魔術師たちが用意したものだったが、兵士たちは無断で持つてきてしまった。

そして誰が指示するまでもなく、ポルメリアと悪魔たちの乱戦に向かって矢を放った。

いくら魔法の矢といってもそれだけで悪魔達を倒せるような、そんな甘いものではない。

普通の兵士達の力では牽制するのが関の山だ。だがポルメリアにとってはそれで十分だった。なぎ払うように二体の悪魔を倒す。後から迫る相手には浮遊盾がその視界を遮る。視界を遮られ、怯んだ悪魔の隙をポルメリアは見逃さない。殴る。突く。殴り飛ばす。

何本かの魔法の矢を受けた悪魔が、怒り狂って何かの煙を吐き出す。不吉な暗い紫の煙は恐らく毒だ。

風上からそれを吐き出されれば、魔法陣の力が弱まっている瓦礫の城壁付近の兵士たちは、

一たまりもなく巻き込まれ死んでいくだろう。だがその悪魔は毒を最期まで吐き出す事はできなかった。

正面からポルメリアに打ち据えられ、首が歪に曲がり、よろめいたところを再度殴られる。

止めは銀色の刃が悪魔の体を貫いて、それで終わりだった。

追撃者を全て倒したポルメリアは、兵士達の歓声を落ち込んだ様子で受けながら帰還した。

「すごいよ、ポリー。あんなに悪魔を一人で倒すなんて、聞いたら皆きつと喜ぶよ。どうしてそんな顔しているの？」

自分の心配が杞憂に終わったポルメリアの活躍にディエスは喜ぶが、当の本人が浮かない顔をしている。

彼女は反省する事、仕切りだ。

「崩れた城壁から出撃するなんて、迂闊でした。

追撃してくる敵を振り切らずに戻ったら、そこから敵の侵入を許してしまうのに。明日からはもっと考えて出撃します」

そう言われればその通りだが、結果として敵を一方的に倒したのだから兵士達にしてみれば些細な事に過ぎない。

彼らは気にした様子もなかった。

だがディエスはポルメリアのその言葉を聞いて安心した。大丈夫、彼女は戦いに酔っている訳ではない。

彼女はやっぱり自分達を守る為にやってきた『英雄』なのだから。

「ポリー、明日も出撃するの？なら明日も僕が歌うよ。ポリーが力を出し切れるように、しっかりと歌うよ」

周りに人がいるところで、君の為に歌うとは流石に言えなかった。それでも兵士たちは少年に過ぎないディエスを冷やかす。

「ありがとう。よろしくね」

明日も、そしてその後も、彼は彼女の為に歌うつもりでいた。そして彼女の武勲全てを見届けて歌にするつもりだった。

彼女はケルマデイクの救い主になるに違いない。

彼女の歌をつくる事が吟遊詩人としての彼の名誉になるだろうが、

しかし彼はそんな事を考えて彼女の歌をつくる気になったのではない。

愛しい彼女のその姿を、物語にして永久に語り継ぎたい。

穏やかに微笑む彼女の姿を見守りながら、ディエスはそんな事を淡く、切なく考えていた。